

# ぶれない頭と眼を養う「哲学的訓練」

## ——指針なき現代の一步先を読み解くための実践講座

佐藤優 （聞き手・小峯隆生）

※外交の最前線で培った対人術の要諦をまとめた書籍『人たらしの流儀』で、佐藤優さんの聞き手を務めた小峯隆生こと、私は、筑波大学で『コミネ語り』と称した講座を不定期でおこなっている。私の講座に、佐藤優さんをゲストスピーカーとして招き、始めたのが、このワークショップ。新しい世界観を身に着けるべく、今月も、ともに学んでいこう。

### 第二回

#### 「学問」はヨーロッパにしかない!?

佐藤 改めて問いますが、「学問」とは何でしょう？

それは、実学です。現実社会で役に立たなければ、意味がありません。

皆さんは実学というと、経営学や、経済学といったものを思い浮かべるかもしれませんが、文学とか、哲学とかを含めたものが実学です。

ヨーロッパでは、経営学や経済学しかやっていない教育機関は総合大学（ユニヴァーシティ）とは呼びません。総合大学には、文学、哲学はもちろん必ず神学部があるのです。

——神学も実学ですか？

**佐藤** 印象からすれば 21 世紀に神学？ 実践的なものだけ学べば充分なのでは？ と思われるかもしれませんが、人間は、一見、意味のない、現実社会とは遠いところにあるものを学ぶことが必要です。それによって、いまの自分の目ではしっかり見えていないものを理解するための「回路」を身につけることができるのです。

そのため近代的な世界像ともかけ離れ、現実社会ではまったく役に立たないと思われる神学部が、いまだにヨーロッパには残っているわけです。

ただ、日常感覚で言うところの「学問」が存在するのは、ヨーロッパの中でもドイツだけです。イギリスにもアメリカにもありません。

——どうして、ドイツなんですか？

**佐藤** 17～18 世紀のバロックの天才で、微積分法を発見したゴットフリート・ライプニッツがドイツにいた、ということが大きいです。

彼が登場する前のドイツ思想界は、ラテン語による著述や借用語が大半を占め、語彙体系も確立していませんでした。そんな時代に現れたライブニッツは、フランス語、ラテン語、ドイツ語、この3つの言語で自分の考えていることを自由に表現できました。

彼の弟子クリスティアン・ヴォルフによって、ドイツ語の哲学用語が確立され、日常語にまで落とし込まれたのです。

日本語で哲学を語ると、悟性、理性、感性、認識とか、得体のしれない難解な言葉が出てきますが、ドイツ語においては皮膚感覚でわかる日常語なので、ドイツ語を母語とする人たちは哲学を比較的容易に理解することができます。

先に述べましたように、学問とは実学を身につけることです。

実学の中には、文学、哲学を含むと述べました。

その中の哲学は、ドイツにおいては、日常語までに落としこまれていることで「学問」として確立しているのです。

このドイツに存在する「学問」。その源流はギリシャにあります。

古代ギリシャでは、「知識」のことをエピステーメーとかテクネーといいます。自動車教習所でいえば、実際にハンドルを握る技術教習がテクネーで、学科教習にあたるのがエピステーメーです。エピステーメーは、物事を頭で理解することを指します。

当時から、そうした言葉があるように、古代ギリシャの人々は、物事を観察し、その中に理屈があるので、と考えた人たちでした。

——ギリシャ人、何を観察して、どんなことを考えたんですか？

**佐藤** たとえばアリストテレス。彼は、糞は時間が経つと臭いが消えるが、小便はますます臭くなるのはなぜか？ そんなことを真剣に考えていたのです。

主体と客体にわけて考えてみましょう。

——主体と客体???

**佐藤** サブジェクト（主体）とオブジェクト（客体）にわける、言い換えると、見るものと、見られるものにわける、ということです。

われわれ日本人は、基本的に主体と客体をわけません。

たとえば、パンッと、合掌してみてください。パンッと音がしますよね。このとき、右手が音を出したのか？ 左手が音を出したのか？ 自分にも、他者にもわかりません。

また、合掌されている手を周囲の人が見たとき、右手が左手を触っているのか？ 左手が右手を触っているのか？ どっちが触って、どちらが触られているのかわかりません。判断できないわけです。

このようなこと、考えたこともない人が大半だと思います。しかし、主体と客体に分けて考える訓練をすることで、ヨーロッパ的な意味での真理に近づくことができるのです。

——具体的には、真理にどのようにアプローチしていけばよいのでしょうか？

**佐藤** 哲学用語の「ロゴス」。このロゴスの解釈（訳）の変遷、ロゴスとは何かを考えるアプローチからその方法を見ていきましょう。

——ロ、ロゴスって、何ですか？

**佐藤** ゲーテの『ファウスト』読んだことありますか？

——……ありません。

**佐藤** ファウスト博士が、ヨハネによる福音書の冒頭をドイツ語に翻訳するシーンがあります。

ギリシャ語では、「初めにロゴスありき」。

博士は、最初何と訳したのか。博士はまず『言葉（ヴォルト）』と訳します。

——初めに言葉ありき???

**佐藤** すると、『私は言葉を信じない』と言って、2回目に『初めに心（シーン）ありき』と訳します。

しかし、「心はすべての物をつくりだせるのであろうか?」と自問して、3回目に、『クラフト=力』と訳します。

やがて「力でも、どうも違う感じがする」として、最後は『タート=行為』と訳すのです。

これは、4個の翻訳と考えるより、4通りのアプローチと考えるべきでしょう。

——なるほど。4方向から、対象に接近して、その言葉=ロゴスの真意を掴もうとしてるんですね。

**佐藤** そうです。

『言葉』は、ギリシャ的アプローチ。

『心』は、ユダヤ・ヘブライ的アプローチ。

『力』は、ニュートンのアプローチ。

『力』については少し難しいので、事例として、今日の日本周辺の国際関係をニュートンの『力』でアプローチして考えてみましょう。

——ニュートンは、引力とか、重力ですよ……。

**佐藤** そう、その「力」という観点から、力の均衡で、国際関係を読み解いてみましょう。

いま、北方領土でロシアは居丈高い たけ だかになり、竹島では韓国が相当強い調子になっています。

尖閣諸島でも、中国がどんどん自己主張を強めています。

—なんでなんですか？

**佐藤** 国と国の境界線は、双方の力関係で決まります。いまの日本の国力を見てみると、3.11の東日本大震災以降、明らかに弱くなっています。

そうなると、諸外国は線を引き直す運動に出てきます。力の論理です。

—尖閣諸島に容易に中国が出てくる。

**佐藤** そうです。この1年、力関係が変わりつつあるのです。

—わっ、なんかわかりやすい。四番目の『行為』のアプローチはどうなんですか？

**佐藤** 京都学派の哲学者で田辺元<sup>たなべはじめ</sup>という人がいます。20世紀の日本で恐らく一番、頭がキレル哲学者だったでしょう。

この田辺先生が、戦時中から小中学校の先生相手に年に1回、4年間哲学の講義を行っていました。その1年目の内容をまとめた『哲学入門』という本があります。

それを読むと、前出のゲーテの、言葉、心、力、行為というのをどう解釈するかについて、

「これは実は、歴史的発展に於ける考え方の変遷なんだ」と書いています。

先ほどの私の説明の元ネタは、田辺元氏のものだったのです。

『行為』のアプローチは論理的なアプローチです。このアプローチは、時代背景によっては大変な悲劇を引き起こすこともあります。

昭和 15 年に、田辺元先生は京大生を相手に公開講座をおこない、その記録が『歴史的現実』（岩波書店）というタイトルで出版されてベストセラーになりました。

そこには、「これからは総力戦の時代になる。空襲があれば私たち銃後にいる人間も、最前線に行く兵たちと同じで、いつ死ぬか分からない。しかし、個々の人の生命は、有限だが、悠久の大義のために生命を捧げるならば、永遠に生きる。生きるということは死ぬということだ」といったことが書かれていました。

この田辺元先生の『歴史的現実』をかかえて、多くの若者たちが、特攻隊に志願して、  
散華さんげしました。

——人を操る哲学者、怖いじゃないですか！！

佐藤 ですから、哲学者は、自らの言葉によって、他人に命を差し出させる可能性があるということを充分注意していただきたいと思います。

〈つづく〉